

〔資料〕

グジャラートとヒンドウスターンに
おけるオランダ東インド会社
1620年—1660年
(I)

H. W. ファン・サンテン
長 島 弘(訳)

はしがき

ここに訳出を試みるのはオランダ人ファン・サンテン氏 (Hans Walther van Santen, 1953年生まれ) がオランダのライデン大学に提出して1982年に文学博士号を取得した学位論文 *De Verenigde Oost-Indische Compagnie in Gujarat en Hindustan, 1620—1660, Leiden, pp. 289* である。本書は著者による私費出版であり出版コードも付されていない。著者にはすでに同大学のコルフ氏 (D. H. A. Kolff) との共同校訂・注・解説による *De Geschriften van Francisco Pelsaert over Mughal Indië, 1627, Kroniek en Remonstrantie, 's-Gravenhage, 1979* があり、同氏の研究の着実さがうかがわれる。

彼の研究については、訳者は紹介と書評のための別稿を予定しているので、ここでは若干の点にふれるに止どめる。

まず本書の目的についてファン・サンテン氏はその緒言で次のように述べている。

「研究の目的は二重である。まず第1に、私は1620年—1660年の時期の北西インドにおけるVOCの貿易を記述する予定である。貿易の資金調達、輸入品および輸出品の構成、そしてグジャラートと中東との間の地域間貿易におけるVOCの活動が語られるであろう。第2に、VOCの資料を基

グジャラートとヒンドゥスターンにおけるオランダ東インド会社, 1620年—1660年 (I)

礎にして当時のムガル朝インドの経済の1つの像を描き、そしてその際、どれだけ、またどのような形で、このオランダの貿易会社がインド経済に影響力をふるったかを追求することが試みられている。」本書の内容は後掲の「目次」からもうかがわれよう。

実際本書はオランダ東インド会社とムガル朝統治下のインドとの関係についてのオランダ人による数少ない研究の1つであり、かつ最新の研究である。

本書はオランダ東インド会社史料を縦横に駆使してきわめて実証的であると同時に、当該問題に関するインドその他での研究成果を十分吸収し、かつそれらに対して大胆に論争をいどむきわめて polemical な研究である。著者が批判し再検討を求める研究の中には、ムガル朝国家と海上貿易の関係についての M. N. ピアスンらの研究, I. ハビーブらのいわゆる価格革命説その他がある。

今回の訳出においては、訳者の都合により、「目次」と「第4章 バヤーナ藍」の前半部分のみをとりあげた。後半部分および他の章についても逐次訳出していく予定である。原書の後注は、各章末に付することにする。

第4章を最初にとりあげた1つの理由は、この部分に関連するテーマについて訳者も拙稿を発表しており、最も興味深く思ったからである。本章では藍の井戸灌漑について述べたハビーブ氏や訳者の主張に批判的な見解が述べられており、また藍価格の動向や最上層の藍栽培者の性格についてのハビーブ氏らの見解にも批判的である。

ファン・サンテン氏はその後外交官に転出してしまい、当面インド関係の研究の継続は望めないものと思われるが、同氏のきわめて興味深いこの研究を我が国に紹介する意義は少なくないものと考え訳出を試みた次第である。

訳文について若干補足説明すれば、[] は原注、() は訳注である。「会社」と「諸会社」の区別は、前者がオランダ東インド会社を指し、後者はオランダ、イギリス両東インド会社、場合によってはフランス東イン

ド会社なども含んだ西洋諸会社を指す。オランダ東インド会社を原文でVOCと表わしている時は訳文でもほぼそれに倣った。重量のポンドは、とくに断らない限り当時のオランダ（とくにアムステルダム）の pond, ponden である（1 pond=0.494kg, 約1.09pound avoirdupois）。

最後に、訳者は公立大学在外研究員制度により文部省と長崎県の援助で1984年11月から1985年3月までオランダで研修を行なったが、その際ファン・サンテン氏からは史資料の閲覧・複写・借用などの便宜を受け、また研究上の種々の御教示をたまわった。本書を恵贈されたのもこの時である。また原書の一部の箇所の訳出に当たっては九州大学の鳥井裕美子氏の御教示をいただいた。ここに記して両氏に対して深甚な謝意を表す。なお訳出の責任はもちろん訳者に存する。

	目 次	原書のページ
緒 言		5
序 論		8
第1章 ムガル朝インドにおけるVOCの貿易		
1.1 序論		26
1.2 スーラトからの輸出		29
1.3 スーラトへの輸入		34
1.4 借入れ手段による資金調達		39
1.5 香料の販売		42
第2章 ペルシアと紅海における貿易		
2.1 ムガル朝インドとペルシアの間のVOCの海運と貿易		51
2.2 ムガル朝インドとモカの間のVOCの貿易		58
2.3 ペルシアにおけるインド人の貿易		63
2.4 モカにおけるインド人の貿易		69
2.5 貿易の拡大とムガル朝の政策		74
		95

第3章 貨幣, インフレーション, 金融構造	
3.1 序論	79
3.2 インフレーション	83
3.3 食料品の価格	90
3.4 賃金	100
3.5 金	103
3.6 銅	105
3.7 銅の貨幣としての使用	112
3.8 借金と手形	117
3.9 アーグラにおける借金と手形, 1637年-1640年	124
3.10 借金とムガル朝当局	127
第4章 バヤーナ藍	
4.1 序論	133
4.2 バヤーナ藍の栽培	134
4.3 バヤーナ藍の価格	142
4.4 買手	145
4.5 藍, 信用貸し, VOC	151
4.6 ムガル朝による統制と搾取	162
第5章 綿織物	
5.1 序論	170
5.2 織物産業と饑饉の結果	173
5.3 アーグラ以東の市場	177
5.4 綿織物の価格	182
5.5 前貸金	188
結 論	195
要 旨 (英文)	206
付 録	214
表のリスト	232

用語解説のリスト	234
注	237
文献目録	272
索引	283
著者略歴	289

第4章 バヤーナ藍

4.1 序論

16世紀にはインドやペルシア、トルコの商人がインド産の輸出向け藍の大部分を陸路ラホール、イスファハン、アレppo経由で地中海周辺の販売市場へ運んだ。海上ルートでのポルトガルの藍貿易のシェアは、この時期かなり小さかった。アレppoが1600年頃まで引続きヨーロッパへの藍の中心的分配市場であった。アングラ南西のバヤーナ周辺で栽培された藍は、16世紀のヨーロッパの市場で「ラウロ藍 indigo lauro」という商品名で、つまりラホール経由（すなわち陸路）で輸送されてきた藍として知られていた。諸会社のアジアへの進出の後、ヨーロッパへの総輸出に占める陸上貿易の割合はたしかに下落したが、この古いルートが全く使用されなくなったと考えることは正しくないであろう。かなりの藍が陸路ペルシアへ送られ、そのうちの一部分は中東と地中海の販売市場に達したと思われる¹⁾。

1600年頃まで藍（*Indigofera tinctoria*, Linn）は、毛織物用の青い染料である大青の染色力の強化のためにのみ使用された。藍はその染色力が大青のそれよりはるかに大きかったので、17世紀になると短期間にはほぼ完全に大青に取って代わった。藍の需要が大いに増大し、諸会社の17世紀前半の貿易の最重要物産の1つとなったのである。しかし、1645年頃にヨーロッ

グジャラートとヒンドゥスターンにおけるオランダ東インド会社、1620年-1660年（1）

パでのインド藍にたいする需要が西インド諸島およびスペイン領アメリカのプランテーション産の藍との競争によって減少した。バヤーナ藍に対するヨーロッパからの需要は大いに減退し、インドで輸出向け品種の藍の生産が減少した。同様の生産拡大と縮小の過程が18世紀末から19世紀にかけて——その時ははるかに大規模にはあったが——起こった。その頃藍は再び重要な輸出物産になり、とくに北ビハールとドアーブで重要な生産地域が生まれた。19世紀末ないし20世紀初めに合成アニリンとの競争により——今度は決定的にひどく——生産が沈滞した²⁾。

この章で私は17世紀前半における拡大と縮小の過程を記述する予定である。この場合世界市場での諸展開が重要な役割を演じた。しかし、市場経済的諸要素だけがこのアングラの南西で栽培された市場作物の栽培規模に影響を与えたのではない。あまり市場経済的でない別の2つの要素、すなわち信用貸しとムガル朝当局の介入が重要であった。価格の動向と生産規模の変遷は需要と供給の変化によっては完全には説明されない。他の換金作物や食料作物と異なり藍を栽培するために考慮すべき大変重要なことは、藍の栽培の際には信用貸しが得られる可能性が比較的大きいことであった。なるほど藍栽培者はこの作物の場合凶作の危険をより多く冒したし、その栽培は疑いもなくより資本集約的であったが、信用貸しが得られる可能性がより大きかったことがこれらの不利を相殺したように思われる。栽培者に提供された前貸金について詳細に報告したVOC社員たちの通信文が現存するおかげで、この作物の場合の農村での信用関係、および信用制度が機能したところの社会的文脈についてかなり詳細に研究することが可能である。

藍栽培について特別注目すべき第2の点は、1630年から1645年までの時期における行政当局者の関与の増大である。ヨーロッパでの需要が頂点にあり、その価格がかなり上昇した一時期にムガル朝当局が農業剰余のより大きな部分を掬い取ろうと試みたのである。拡大しつつあった藍の栽培に対してより大きな支配権を獲得しようとするこの努力の最も有名な例が

1633年—1635年の藍の独占であった。私は本章で、藍の独占および栽培者に対する圧力の増大が、藍栽培から生まれる顕著な利益のより大きな部分を専有しようとするムガル朝の政策の結果としてもっばら見なければならぬのか、それとも困難の多い独占——それはムガル朝の側からの大きな投資を必要とする——という手段によってまで栽培を統制しようとするための何かよりさし迫った理由があったのかという問題を検討する予定である。会社員たちはシャー・ジャハーン帝の独占の試みをムガル朝当局の「際限ない」貪欲さの証明とのみ見做したけれども、私の考えではそれ以上のものがあっただと思われる。会社員たちが私的な信用供与活動という手段によってその地域に大いに浸透し、「土地権益」を獲得する危険性さえ存在した程であったと推測すべき理由がある。ムガル朝当局は確かに介入と信用供与の肩代わり——結局破壊的な結果に終わったが——を行なうことを強いられたのである。

4. 2 バヤーナ藍の栽培

アグラの南西のバヤーナ、カーヌア、バサーワル、ヒンダウン、トダ・ピム等の周辺で農民が栽培した藍は、17世紀に「バヤーナ藍」の商標名で市場に出た³⁾。17世紀にはこの地域のほかに、メワート（ほぼ今日のラージャスターンのアルワル県）およびクルジャ（アグラの北の今日のブランドシャハル県）でも藍が栽培された⁴⁾。別の重要な生産地域はグジャラートのアフマダーバードの北〔正しくは南西〕にあり、そこではサルケージ藍が栽培された。さらにジャンプサル（ブローチとバローダの間の地）、スインド、デカン、コロマンデル海岸、ベンガルなどで藍が栽培された⁵⁾。一般にバヤーナ藍の染色力が最高とみなされ、サルケージ藍がそれに次いだ。特にバヤーナ周辺および——程度は劣るが——サルケージ辺とコロマンデル海岸で国際市場向けに栽培され、その他は国内の綿布の染色用に向けられた。

ヨーロッパでの需要が最高潮であった1630年—1640年の頃に、会社はアジアの他の地域——できれば完全な統制下の地域——で藍を栽培しようと若干の試みを行なった。その方法により、インドで栽培された藍への依存度が減ることが期待された。しかし会社はほとんど成功しなかった。アンボイナや台湾、モーリシャス、タイで栽培された藍の品質は期待にはほど遠かった⁶⁾。ようやく1700年以後にジャワでの栽培が真剣に行なわれ、そこで栽培された藍が1734年から恒常的にアムステルダム市場に現われたのである⁷⁾。

特にペルサールトがバヤーナ藍の栽培方法について詳細に記述している。土地を数回耕起した後、バヤーナ周辺では6月の最初のモンスーンの雨の間に1ヘクタール当たり40ないし45kgの種子が播かれた。十分な雨によりその作物は4カ月以内に約70cmの高さにまで生長した。9月末か10月初めに人々はその藍の木から葉を刈取った。この最初の刈取り（これをナウティ nauti 又はナウダ naudha, すなわち若木という）の後、農民はその灌木を根元のところで切取った。その翌年人々はその木から2回目の刈取りを行なった（これをジャーリー-jari, すなわち根から生じたものと呼ぶ）。もし十分な雨が降れば、9月にもう1度刈取られ、そして時には9月末か10月初めに第4回目が行なわれた。この最後の刈取りはカティル katil（すなわち劣った、悪いもの）と呼ばれた。このカティルは種子を取るために畑に放置されたり、あるいは良い藍と混合された。会社はジャーリーとナウティを優先的に買った。したがって栽培者は藍の木から3、4回収穫した——最初の年にナウティを、2年目にジャーリー（1回又は2回）とカティルを。3年間の〔2年間の誤りか〕の栽培の後、農民はその畑を1年間休耕地とした⁸⁾。ペルサールトによれば、この作物は「他の果物や作物以上に多くの困難や災難を被った」⁹⁾。特に播種直後の天候条件が収穫の成功にとって決定的に重要であった。雨が少なすぎれば種子が枯れたし、多すぎればそれが腐るか洗い流された。他の決定的な時期は収穫直前であった¹⁰⁾。藍の収穫はモンスーンによってほとんど決定され、したがって激しい生産量の

変動がみられたのである。

ペルサートが藍の栽培についての著述の中で何ら、そしてまたこの時代の他の著者の誰も、灌漑について言及していないということからみて、そして収穫の成功に対するモンスーンの影響が強調されていたことからみて、バイーナ周辺で栽培された藍が灌漑されていなかったということは大いにありうることである¹¹⁾。これは、アフマダーバード付近で栽培された藍とは対照的である。サルケージ藍にはラビー作（春作）もカリーフ作（秋作）もあった。ラビー作はカリーフ作より劣るとみなされたが、井戸灌漑されたのである¹²⁾。

収穫されたバイーナ藍は、9月末か10月初めに水漕に入れられた。1つの水漕に約1 ビーガ・エ・ダフタリー-bigha-i daftari すなわち約6分の1ヘクタール分の生産物が入れられた¹³⁾。栽培者が井戸から水を水漕に注ぎ入れて藍の葉を浸した。バイーナ藍はその優れた品質の重要部分をその井戸水の硬水性から得ていた。柔らかくした後、その葉を別の水槽に移し、全ての染料分が溶け出してしまうまでその中味を揺さぶり続けた。そして沈澱物を布の上に置き、それを丸めて球形にし、それをさらに乾燥させた。1ビーガの面積当たりの生産物は12セル—20セル〔1セル=40分の1マン。1マン=約50ポンド（蘭）〕の純粋な藍玉であった。藍の残余の部分、すなわち「セートゥseeth」は肥料として用いられた¹⁴⁾。藍玉は灰の中で丸められて堅い殻が作られることにより、含有水分が徐々にしか蒸発しなかった。12月に既に十分1カ月経過した藍玉を買う時には今後8分の1の重量の目減りがあり、1月に買う場合には16分の1の目減りがある等々のことを考慮に入れなければならなかった。ある推定によれば、藍玉は製造の時からそれが十分に乾燥する2月までに重量をほとんど半減させたようである。単位重量当たりの価格はそれに呼応して——需要と供給とは無関係に——上昇した¹⁵⁾。1620年頃まで売手は収穫直後の藍玉の中に多量の湿気があることを計算に入れていた。その頃買手は40セル分の価格で47セルの藍を受取っていた。その後藍市場で買手にくらべて売手の地位が向上した。買手

グジャラートとヒンドゥスターンにおけるオランダ東インド会社, 1620年-1660年 (I)

が受取る「超過重量」は次第に減少した。1635年には1マンつまり50ポンド(蘭)当たり7セルの代わりに1セルしか余分に渡されなくなり, 1637年からはその「装いが完全にとりはらわれた」のである¹⁶⁾。

藍葉から藍玉に製造するために栽培者——おそらく富裕な者のみ——は労働者を雇用し, 後者は日給を藍または現金で支払われた¹⁷⁾。ハビーブ(I. Habib)が推察するような藍製造過程での「栽培者間の協力」について, 私はVOC史料中に少しもその言及を見いだすことができなかった¹⁸⁾。私の印象は, 藍は各栽培者によって個人的に, もし必要な場合には雇用された農業労働者の援助を得て, 製造されたということである。

市場作物である藍の栽培と食料作物との間の対照は大きい。藍の豊作は特に播種直後と収穫前数週間における適度の雨量に大いに依存していた。不作の危険性は, 藍作の場合食料作物の場合より疑いもなく大きかった。第2に, 藍は相対的に資本集約的な生産物であった。栽培者は, 藍を輸送可能な製品にまで製造するために自分の土地に複数の水溜と1基の井戸を持っていなければならなかった。さらに, 1696年のサルケージ藍の製造についての記述からうかがえるように, 複数のかなり大規模な道具が使用された¹⁹⁾。藍栽培の最も資本集約的な側面はおそらく藍葉を藍玉に製造する労働者の雇用であったろう。

VOCは, すでにアングラに居留しはじめた直後に, 藍は収穫後できるだけ早く必ず栽培者自身の村々において買うべきであると悟った。藍はそこではアングラでより安価であったし, その時はまだ砂が混入されていなかった。したがってバヤーナ藍は, VOCがインドで購入した農産物のうち, 会社が栽培者と直接交渉してインド人中間介在者を使用しなかった唯一の農産物であった。より富裕な農民たち——ここではおそらく藍企業家と呼んだ方がよいであろう——は特にバヤーナ村とその直接の近隣に見られた。ペルサルトルは1626年に, ミールザー・サディークとカーズィー・ファズル(?)という人物がバヤーナにおける二大栽培者であると述べている²⁰⁾。10年後にはハージャ・アフマドがバヤーナにおけるその地位を奪つ

ていたように思われる。このハージャ・アフマドは豊作の際には自己の支配下の700ビーガ——100ヘクタール以上——の土地で3,000マンの藍を生産できた〔誤解か。3,000マンを生産するには7,000ビーガ（1,000ヘクタール以上）が必要〕。1637年にVOCが彼から913マンの藍を45,670ルピーで買った²¹⁾。バイヤーナに関してだけそのような大企業家たちについての言及がなされている。このことから、同地にあらわれた〔経営〕規模の拡大は、財政豊かな企業家が最も優秀な藍の栽培地バイヤーナに特に投資を行なったという事実の結果であったと結論することができるであろう²²⁾。主にヒンドゥー教徒が居住する地域において藍栽培者の中でイスラム教徒の名前が卓越していることは、彼らが「ジェントリーに似た gentry-achtige」出身であることを示している²³⁾。

一定地域からの全栽培者の会合で、農民たちは共同で最低販売価格を定めた。ヒンダウンにおいて近隣の全ての農民が参加した会合で定められた販売価格が他の藍作諸村でも基準として適用された²⁴⁾。この最低価格の共同決定は、個々の売手が買手によって互いに対抗させられて買手に漁夫の利を占められることを防ぐことを目的としていた。1643年についてはこの価格決定が一会社員によって詳細に記述されている。その年売手たちは、より多くの買手があることを期待して、収穫後約2カ月の12月末まで販売価格を提示することを拒否した。買手の意図についての情報交換のためおよび追求すべき戦略決定のために、毎日売手たちによって連絡が行なわれた。待つことによって生産物に対する価格の向上を獲得しようとしたこの努力は結局失敗した。「待つことのできない貧しい人たちが早くも会社に売ることを余儀なくされたのである²⁵⁾。それゆえ、収穫の程度が明らかになり、栽培者が買手の総需要について若干の見通しを得るやいなや、買手と売手にとってガイドラインとして適用されるべき価格が共同で決められ、そして次に来るべき販売戦術が定められた。その後価格は市場状況に伴って変動した。共同の価格決定は、需要が大きな——そして需要の規模が価格によってあまり左右されない——状況下では、自己の生産物にできるだ

け高価格を獲得しようとする売手の側の有効な手段とみる事ができた。しかし、1643年がその例であったように、需要減退期にはそのような政策はほとんど成功しなかった。最大の買手であるVOCは価格が下がるまで待つ事ができた。アムステルダム市場でのアメリカ藍との競争という点からみて、会社はその頃もはやアグラであまり高値で買うことが許されなかった。栽培者は、我々が後に見るように、藍が売られる前に地税を支払わざるをえなかったので、あまり長い間売りびかえすることができないということのアグラの会社員たちはよく知っていた。したがって藍作農民の共同販売政策は、十分な蓄えを持たないか資金を借りることのできない小規模農民によって破られたのである。

17世紀にムガル朝インドで栽培されたあらゆる農産物のうちで、疑いもなく藍が最も多く記述された。それは多年にわたって量的推定がなされている唯一の生産物である。それで他のデータで補足されれば、アグラ南西地域での栽培量をかなりよく推定することができる。需要の変動に対して栽培者の側で栽培面積の拡大あるいは縮小という形で適応がなされたと一般的にいえるけれども、この意識的な適応がモンスーンの影響下での収穫量の変動によってしばしば妨害されたということもできる²⁶⁾。さらに藍の栽培に関するムガル朝の政策が生産の規模にかなりの影響を与えた。

ペルサルトは平年のバヤーナ藍の生産量を約80万ポンド(蘭)と推定した²⁷⁾。平年とは彼によれば1621年より前の状態を意味した。なぜならペルサルト自身がインドにいた時期(1621年-1627年)にはそれだけ高い生産が得られなかったのであり、それゆえ彼の推定が高すぎた可能性がある。1621年は雨が多すぎて不作であったし、1622年-1626年に藍は3年間の大旱魃と1度の蝗害を被らねばならなかった²⁸⁾。1626年はわずか40万ポンドの収穫となり、続く2年間も収穫高が大きくなかったようにみえる。1628年にある会社員が藍の収穫が過去5、6年悪かったと書いている²⁹⁾。しかし1629年は豊作だった。藍の作付面積が拡大したようである。1630年には「藍anijlの栽培者が減少したというより増加した」と言われた³⁰⁾。しかし1630

年には、豊作だろうと特に予想されていた収穫が、インドの大きな部分を支配した大旱魃によって凶作となった。1631年もまた収穫がかなり悪かった³¹⁾。1632年以後については一連の推定収穫量が得られる（表14を参照）。

1632年には、1620年—1660年の間でおそらく最多量のバヤーナ藍、すなわち70万ポンドが収穫された。1633年と1634年もよい収穫であった。ジャー・ジャハーン帝の藍の独占（1633年—1635年）が一般に想像されているより少ししか収穫の結果に影響を及ぼさなかったということは瞠目すべきことである。耕作された藍を徴収する兵士たちの暴力によって栽培者たちの藍栽培への意欲は減退した筈であろう。それもまた事実であった。しかしその前年に植えられた藍の第2回目の収穫——すなわちジャーリー——がまだ50万ポンドの収穫を可能としたのである。1635年に藍独占の結果があらわれた。その年にはごくわずかの藍しか植えられず、きわめて沢山の栽培者が食料作物の播種へ転換するか自分の土地を捨てるかした。1634年に一社員がわずか2,000ピーガの土地に藍が播種されたにすぎないと推定した。そして1635年に人々は最高7万ポンドの収穫しか予測しなかった³²⁾。しかしこの予測はあまりに暗すぎた。前年の50万ポンドに対して、1635年には藍の栽培面積が急減したことによってわずか21万ポンドしか収穫がなかったが、それでもその収穫量は予測量の3倍であった。

独占の終了後、農民たちは大変多くの藍を播いた。播種量からみて、ノウティ作の収穫量45万ポンドは、気候条件の悪さの結果としてもなお期待外れであった³³⁾。1637年には再び多くの藍が播種され、それに加えて大量のジャーリー作が期待された。しかし、7、8月の雨不足のためにほとんど完全に凶作であった³⁴⁾。栽培面積の拡大によって需要の増大に乗じようとした栽培者たちの企ては、その年モンスーンの不安定さのために失敗したのである。その後の数年間それはより成功した。1638年から1643年〔1642年か〕までは、中程度の収穫（1639年、1640年）か豊作（1638年、1641年、1642年）を記録したのである³⁵⁾。1643年以後収穫は突然大きく減少した。一方では諸会社の需要の減退——とその結果としての低価格——により、他

グジャラートとヒンドゥスターンにおけるオランダ東インド会社, 1620年-1660年 (I)

表14 バヤーナ, メワート, クルジャ藍の推定収穫量 (単位ポンド [蘭])

年	Bayana 藍	Mewat 藍	Khurja 藍
1621	80,000以下		
1626	±400,000	200,000	200,000
1632	700,000		
1633	500,000		
1634	500,000		
1635	210,000		
1636	425,000-475,000		85,000
1637	85,000-105,000		
1638	530,000		
1639	±350,000		
1640	350,000-425,000		
1641	425,000以上		
1642	630,000		
1643	210,000-230,000		
1644	60,000-125,000		210,000-260,000
1645	100,000	53,000	160,000
1651	170,000		
1679	170,000		
1680	117,000		
1681	64,000		

出典: F. Pelsaert, *Kroniek en Remonstrantie*, pp. 259, 260; VOC 1109, f. 167r.; VOC 1108, ongef. 67r.; VOC 1117, f. 622v.; idem, f. 456v.; *Dagregister Batavia*, 1637, p. 104; VOC 1119, p. 1643; Coll. Geleynssen no. 101, 5-12-1637; VOC 1128, f. 292r.; Coll. Geleynssen no. 97a, 27-8-1639; VOC 1135, f. 482r.; VOC 1139, f. 398v.; VOC 1137, f. 265r.; VOC 1139, f. 239v.; VOC 1150, f. 56r.; VOC 1151, f. 877v.; VOC 1149, f. 582v.; VOC 1151, f. 837v.; VOC 1152, f. 488v.; VOC 1188, f. 503r.; VOC 1119, p. 1648; VOC 1151, f. 875v.; VOC 1379, f. 2474v.

方では税負担の相変らずの重さにより, 栽培者たちは志気を奪われた。収穫量は1643年に21万ないし23万ポンドにまで減少した。1644と1645年には雨不足の影響下で収穫がさらに少なくなった³⁶⁾。メワートとクルジャの藍の収穫量に関して我々が持っている若干のデータは, そこでの藍栽培への関心が全く, あるいはほとんど減退しなかったことを示している。メワートとクルジャではより安価で下等の藍が栽培され, おそらくそのかなりの

部分がインドの市場で販売された。したがってこれらの地域の栽培者はヨーロッパでの需要の減退から影響されることがより少なかったのであろう。

しかし、バヤーナ藍の栽培が完全に停止されるであろうとのアークラの会社員たちの予測は実現しなかった。VOCのこの作物に対する関心の減退の結果として1643年以後その栽培量に関する情報が減少したが、その少ないデータは栽培がより低水準でながら存続し、そして1646年や1649年、1650年、1657年、1660年の不作にもかかわらず、おそらく栽培規模が再び拡大したことを示している³⁷⁾。いずれにしろ、1643年—1645年に表われた下降傾向が1660年まで続いたのではなかったのである。

しかし1660年頃再び藍栽培から食料作物栽培への大規模な転換についての言及がなされている。収穫の量的推定は欠けているが、しかし、減退したままのヨーロッパからの低需要、おそらくそれと関連した中東からの需要の減少、この地域での1657年の氾濫、シャー・ジャハーン帝の死去の噂——それはその結果として藍作地帯で「完全な反乱」を引き起こした——、そして最後にその当時数年間の食料不足が、食料栽培への大規模な転換を惹起したようであり、「そのために当地での藍の外国貿易がいずれ消滅すると思われた」³⁸⁾。ここでは「外国」という言葉が強調されねばならない。世界市場の諸展開に高度に依存していたバヤーナ藍のみが減少したのである。サルケージやメワート、クルジャの藍を栽培する意欲は減退しなかったように思われる。

要約すれば、ゆるやかな拡大の時期が劇的な縮小の時期によって取って代わられたということができる。世界市場での諸展開がこの場合決定的な役割を果たした。栽培の絶頂期はほぼ1630年—1642年であった。このうち、藍の栽培面積が縮小した1635年は例外であり、過度の雨不足のためにほぼ完全な凶作となった1637年も同様である。1644年頃と1660年前後にはその面積がさらに激減し、生産量が減少した。その間の時期は、栽培が同じように低い水準にとどまったか、あるいはおそらく再び規模が拡大した。し

グジャラートとヒンドゥスターンにおけるオランダ東インド会社, 1620年-1660年 (I)

かし、このことはあまり明らかではない。というのは会社が買う藍の量が減少するにしたがって藍栽培についての情報も減少したからである。

4. 3 バヤーナ藍の価格

1609年から1682年までのバヤーナ藍の価格の変遷が表15に復元されている。これらのデータの解釈の際には、生産物の性質による明らかな偏向を計算にいれなければならない。以前に述べたように、湿った、収穫直後に買われた藍は乾燥によって相当部分目減りした。たとえば会社が1637年9月に1マン当たり37ないし38ルピーで買った藍は、十分に乾燥した時には1マンすなわち50ポンド当たり51ないし53ルピーの価値があったであろう——つまり約40%の格差である。それゆえ提示された価格が湿った藍の価格かそれとも乾燥した藍の価格かを知ることは大いに重要である。しかし大部分の年に関してこの点は不明である。

このように価格の解釈の際に「乾燥による価格差」を十分計算に入れなければならないけれども、それでもこの生産物の大体の価格の変遷を再構成することは十分可能であると思われる。1614年から1630年までの価格は、1マンすなわち50ポンド当たり30ルピー前後のゆるやかな範囲内にまとまっている。しかしハビープが1595年と1609年のものとして提示した価格はそれよりはるかに低い。アブル・ファズルの『アーイーネ・アクバリー』によると、1595年の価格は10ないし16ルピーであった。1609年の価格は1マンすなわち50ポンド当たり16ないし24ルピーであった。1610年以前に関する他のデータを我々は持たない。もしこれらの価格が正しい時には、16世紀末か17世紀初めに需要の増大の影響で大きな価格騰貴が起こったと確認しなければならない。すでに言及されたように1614年と1630年の間は価格が安定したが、17世紀の30年代にさらに再び大きな価格騰貴が起こった。1645年まで価格は1マン当たり45ルピーの周辺を上下したのである。この時期には平均的価格からの逸脱もあった。最騰貴点として1633年末と1634

表15 バヤーナ藍の価格 (1マン=50ポンド[蘭]当たり。単位ルピー)¹⁾

年			
1595 (H) ²⁾	10-16	1639 7月	45-52
1609 (H)	16-25	1639 8月	49-51
1614 (H)	31	1639 10月	27-28(乾燥時43-44)
1614-1615(H)	34-36		
1615 (H)	27-28	1639 10月末	36-37(乾燥時42-43)
1616 (H)	29-28		
1617 (H)	28-36	1639 11月	36(乾燥時41-43)
1619	24-25	1639 12月	32-37.5(乾燥時39.5-40.5)
1620	26.5-32		
1622-1623	25.5	1640 11月	35(乾燥時39.5)
1623-1624	25.75 40へ上昇	1640 12月	40.5-43
1624-1625	22 30-34へ上昇	1641 2月	44-45
1626 (H)	30	1642 1月	37-39.5
1628-1629(H)	36-37	1642 2月	39.5-43
1629	36.5	1642 12月	30
1630	28-38	1643初	28-30.5
1630-1631	35.75 40へ上昇	1644 10月	24.5-26.5(乾燥時32-33)
1632	36-40		
1633初	40-40.5	1644 12月	35-40.5
1634	61	1645初	36-40.5
1635	50	1645 11月	37.5-47
1635末	34-45	1645 12月	34-37.5
1636初	38-46 51-52へ上昇	1646 10月	36
1636 10月	35-36(乾燥時41-42)	1646 (H)	42
1636 11月	33-42(乾燥時42.5-43)	1647	37.5-38.5
1637 3月	45.5-47	1649	39.5-42.5
1637 9月	37-38(乾燥時51-53)	1650初	34-36
1637 10月	40.5-41.5	1650 (H)	45以上
1637 11月	47	1652初	±46
1637 12月	49-51	1652末	38-39
1638 1月	50-52	1655	28以下
1638 3月	55-57	1655-1656	33
1638 4月	60-63	1656 2月	31
1638 7月	54.5-56.5	1656 3月	33
1638 10月	31-33	1658	38
1638 11月	42.5-43(乾燥時49-50)	1659	32
1638 12月	43-44	1660	33
1639 1月	38-43	1661	46-52
1639 3月	48-49	1662	40.5
1639 4月	51-53	1663	34-36
1639 5月	49-51	1679	34.5
		1682	±40.5

1. 1636年以後は53ポンドに相当する1マン (1 man=41 ser, 30 paisa=1 ser) を50ポンドに相当する1マン (1 man=40 ser, 30 paisas=1 ser) に換算してある。VOC 1117, f. 521v., Vertoon van de lijwaten door IJ. Pietersen, Surat, 15-4-1635.

2. (H) を付したデータは I. Habib, *The Agrarian System*, pp. 86-88 に依る。VOC のデータの不足分を補う価格のみがここでは付加されている。輸送費が不明なため、スーラトなどでのバヤーナ藍の価格は採用されていない。

出典: *Pieter van den Broecke in Azië? II*, p. 387; P. v. Dam, *Beschrijvinge. II, 3*, pp. 9, 10; VOC 1082, f. 47v.; VOC 1079, ongef. 226v.; VOC 1090, ongef. 288r.; J. P. Coen, *Bescheiden*, VII, 2, p. 1547; VOC 1100, ff. 184r., 185r.; VOC 1103, f. 225v.; idem, f. 265v.; VOC 1099, f. 17v.; VOC

1109, f. 101r.; idem, f. 167r.; VOC 1108, ongef. 66v.; VOC 1117, f. 505r.; idem, ongef. 726r.; VOC 1116, f. 65r.; idem, f. 71r.; VOC 1119, pp. 1643, 1645; idem, p. 1655; idem, p. 1768; VOC 1128, f. 172r.; VOC 1121, ongef. 1613r.; VOC 1127, f. 96v.; VOC 1128, f. 187r.; idem, f. 191v.; Coll. Geleynssen no. 101, 5-12-1637, idem, 19-12-1637; idem, 1-1-1638; idem, 26-1-1638; idem, 22-2-1638; Coll. Geleynssen no. 101, 13-3-1638; idem, 12-4-1638; VOC 1127, f. 116v.; VOC 1130, p. 1144; VOC 1128, f. 291v.; idem, . 292r.; idem, f. 269v.; VOC 1132, ongef. 522r.; Coll. Geleynssen no. 103, 5-2-1639; idem, 17-4-1639; idem, 6-5-1639; VOC 1130, p. 1226; Coll. Geleynssen no. 97a, 30-7-1639; Coll. Geleynssen no. 103, 30-7-1639; Coll. Geleynssen no. 97a, 27-8-1639; idem, 6-10-1639; idem, 18-10-1639; idem, 10-11-1639; idem, 2-12-1639; idem, 15-12-1639; idem, 30-1-1640; VOC 1134, f. 140v.; Coll. Geleynssen no. 174, 30-11-1640; Coll. Geleynssen no. 166a, 21-2-1641; VOC 1134, ongef. 484v.; VOC 1139, f. 399r.; Coll. Geleynssen no. 161, 25-2-1642; VOC 1137, f. 265r.; VOC 1141, f. 436v.; VOC 1151, f. 878r.; idem, f. 804r.; idem, f. 837v.; Coll. Geleynssen no. 285, 17-3-1645; VOC 1157, f. 488v.; VOC 1152, f. 491r.; VOC 1153, f. 685r.; VOC 1162, ongef. 107v.-108r.; VOC 1165, f.419r.; VOC 1185, f. 663v.; VOC 1178, f. 564r.; VOC 1180, f. 796r.; VOC 1210, f. 776v.; idem, 780v.; VOC 1234, f. 114v.; idem, f. 309r.; VOC 1240, p. 987; *Daghregister Batavia, 1663*, p. 310; VOC 1162, ff. 130r., 130v.; VOC 1349, f. 1635v.; VOC 1379, f. 2474v.; VOC 1188, f. 520v.

年のシャー・ジャハーン帝の独占価格および1638年の1マン当たり61ないし63ルピーという自由市場価格を指摘できる。1640年代には1614年—1630年の時期と多少とも同じ水準にまで価格が下落した。〔その後〕1682年まで提示された諸価格はこの価格からあまり掛離れていない。1661年のみが例外であったようである。

チョードリー (K. N. Chaudhuri) によれば, 17世紀末から18世紀にかけて再び大きな価格騰貴が起こった。彼によればその理由は必ずしも明らかではないということであるが, 「藍価格は通行税の引上げと藍栽培者に対する地税率の引上げ——それらは経費をかなり増大させたであろう——によって騰貴した」との示唆を彼は与えている³⁹⁾。

ハビーブが特にイギリス史料によって結論したような17世紀における藍価格の漸次的上昇は, 私の考えではまだあまり確実ではない⁴⁰⁾。もし1610年以前のあの2つの価格を出発点にとれば, 1600年から1630年までの期間中に約100%という大々的な価格騰貴があったという結論に到達する。しかし問題はこの価格上昇の傾向が17世紀中継続しなかったということである。特に藍に対する需要の増大の影響の下で, 1630年—1642年の時期にとび抜けて高い価格水準があったことを語ることができる。その後, みたところこれもまた主にヨーロッパでの需要の変化の影響の下で, 価格が下落した。

その際諸会社の需要を考慮するだけでなく、アルメニア人、ペルシア人、インド人商人のそれをも考慮しなければならない。我々が後に見るように、彼らはその購買活動においてヨーロッパでの市況に大きく影響されていたのである。結論として、諸会社のインドへの到来以後の価格上昇はありうることであるが、17世紀全体にわたる連続的な価格上昇傾向の存在について語ることはできないといえる。また万一そのようなことが事実であったとしても、藍の価格変遷を単純にインフレーション論争に関連づけることはできないであろう。バヤーナ藍の価格は、他の若干のインドからの輸出品以上に、まさに国際市場での諸展開によって影響されたと思われるのである。

4. 4 買手

VOCは疑いもなく17世紀初めの何十年間かにおけるバヤーナ藍の最大の顧客であったが、唯一のそれではなかった。まず第一に、「先買権所有者」すなわち前貸金という手段によって藍産の一部に対する優先権を持つインド人仲買商人に言及することができる。収穫の後、先買権所有者は信用貸した栽培者から自分の藍を徴収し、市場についての自分の特殊な知識により需要の増大と価格の上昇につけこんで商売した。この活動に必要な資金を先買権所有者は大体他から借入れた。栽培者と買手の仲介をするこれらの人々の1636年と1637年の活動はかなりよく記録されている。1636年に先買権所有者たちは藍産の重要部分を所有することに成功した。その前の数年間の諸会社の買付け行動をもとにして、彼らが農民から買入れた価格より1マンすなわち50ポンド当たり10ルピー高値で諸会社が藍を買取るだろうと彼らは期待した。諸会社はそのような価格で藍を買うことを拒否したが、十分な関心を示したアルメニア人やペルシア人商人への販売のおかげで、その年先買権所有者たちはまだ自分の藍を売って利益を得ることができた。しかしその次の年は事態は彼らにとってあまり良くなかった。

彼らは合計約3万ルピーを栽培者に前貸ししていた。しかしその年凶作となり、先買権所有者たちは自分が前貸した資本の一部分しか藍の形で取り戻せなかった。彼らの幾人かが破産した⁴¹⁾。この活動の危険性は明日である。収穫が過多でなく中程度で、需要が大きい時だけ利益を得る可能性があった。収穫過多の際には商人は先買権所有者から買おうとしないで直接栽培者に藍を注文した。不作の時、先買権所有者は自分が提供した前貸金に対する支払いとして全く、あるいはわずかしき藍を受取ることができないという危険を冒した。多数の買手による競争があることが先買権所有者が成功裡に活動できるためのもう1つの条件であった。1645年の後私はこの藍投機者の群についてのデータに少しも出会わないのであるが、バヤーナ藍に対する需要の減少により彼らがこの舞台から消えていったということはあることである。

その他の買手の活動地域はバヤーナの直接の近隣に限られていなかった。ペルシア人商人はバヤーナおよびメワート、クルジャの藍でかなりの取引を行っていた。彼らは、陸路アーグラ-ラホール-カンダハール-イスファハン経由で、あるいは海路アーグラ-スーラト-バンドル・アッパース-イスファハン経由かまたはアーグラ-スーラト-モカ（又はバスラ）経由で、かなりの量の藍を中東へ輸送した。このうちの一部分は、イスファハン、バスラあるいはモカからアレppoに運ばれ、それから中東とヨーロッパの販売市場へ分配された。インド人商人、特にアフマダーバードとスーラトの商人もまた藍を取引した。彼らは手形によって資金をアーグラへ移送し、買付けた藍をスーラトに輸送させ、その後スーラトからバンドル・アッパースやモカ、バスラへ送った⁴²⁾。1630年のある推定によると、陸路と船でアルメニア人、ペルシア人、インド人商人によって輸出された総量は16万ないし40万ポンドにも上った。これはそのころのVOCによる平均輸出量である約15万ポンドより多い。アルメニア人商人とペルシア人商人の競争——両者は1631年にバヤーナで藍に対して30万ルピーを消費した——が大変価格を騰貴させる効果をもっており、それは、ダンピング政策で彼らをペル

シアと中東の販売市場から締出すことをアングラのVOCの派遣員が提案したほどであった⁴³⁾。しかし重役たちは、そのような大規模な行動にはあまりに高額な投資が必要であるという理由からこの政策を拒否した。

1641年にペルシア人やアルメニア人商人がバヤーナで大量の藍を買うことが予想されていた。なぜなら「このようにヨーロッパで大変高い価格が威勢よく飛抜けており、そしてそれがアレppo経由でペルシアにまで伝播するであろう」からである⁴⁴⁾。言いかえれば、ヨーロッパでの市況がペルシアや中東で取引している商人の藍の買入れ活動に重要な役割を演じていたのであり、藍のルートを喜望峰経由の海上ルートへ移そうとする会社の試みは確かに十分には成功しなかったと結論することができる。陸路輸送はともかくも1640年まではまだ決して廃絶されていなかったのである。

イギリス東インド会社は疑いもなくアングラ付近の藍市場におけるVOCの最大の競争相手であった。イギリス人とオランダ人はバヤーナ藍の個別の買手の中では最も重要であったし、さらにこの物産をヨーロッパのほとんど同じ販売市場で販売しようとした⁴⁵⁾。しかしそこでは予想通りの激しい競争だけでなく、状況によってはお互いの協力もみられた。両会社は、1630年前後の大々的な相互の競争が価格騰貴の効果をもったということを確認していた。この価格騰貴がシャー・ジャハーン帝による独占樹立への誘因であったであろうと思われた。その独占の期間両社はそれを撤廃させるために一致協力したし、その後もまた協調的買付け政策という手段で価格を押し下げようしばしば論じられた。スーラトの商館長が述べたように、「このすばらしい藍取引について一番腹立たしいことは、Gerrit [原文通り。すなわちイギリス人たち]と我々が互いに相手を一敗地にまみれさせようと計り、[その結果]モール人〔イスラム教徒〕とバニヤ人〔ヒンドゥー教徒商人〕がお金を財布の中に蓄えようとするものである。」⁴⁶⁾しかし、バタヴィアとアムステルダムには別の諸意見が生きていた。総督と重役たちは、価格を騰貴させるイギリス人による競争を終らせるためにはもっと良い方法があると確信していたのである。1637年にファン・ディーメンが、生産

されたバヤーナ藍とサルケージ藍の全てを買占めて競争相手を市場から排除する可能性について打診した。しかしアグラのVOCの派遣員であるヘインセン・デ・ヨングによって、そのような行動はとらない方がよいと思いつどまらせられた。もし栽培がごく少数の農民の手の中にあつたならば、全藍産を買占めることは原則として十分可能であつたろう。彼らを取獲に対する前貸金という手段で緊縛できたであろう。しかし多数の栽培者たち——彼らは売手を独自に選択した（そして彼らはVOCによる買付け独占の窮局的な価格引下げ効果に気づいているので独占におそらく反対したであろう）——を相手にしなければならなかつたので、ヘインセンらはその計画を拒否したのである。また財政的理由からもその計画は非現実的であつた。バヤーナとサルケージの藍の全ての買付けのためには会社は確実に150万ルピーを投資しなければならなかつたであろう⁴⁷⁾。藍市場独占へのこの道は会社にとって閉ざされていたのであり、機会が提供されればいつでもイギリス人と共同で買入れる決意を彼らはしていた。それで例えば1640年や1645年、1646年、1648年に、買入れた藍の半分を相手に提供することが合意された。これが欲しい時には、相手はこの藍を買入れ原価で買取ることができた。これが価格騰貴をもたらす競争的買入れ行動を阻止するためのすばらしい保障であることは明らかであつた。両会社はその時から藍市場の支配よりも低価格という共通利益を優先させたのである⁴⁸⁾。

私は会社による買付けにもう少し深入りしよう。表16にVOCの輸出とそれに対応する年の需要——「注文 eis」——のデータの一覧がある。それらのデータの解釈の際には若干の注意がうながされるべきであろう。まず第1に、何年分かについてはスーラトから出帆した船の送り状を欠いている。第2に、これらの輸出量はバヤーナ種だけでなくメワートやクルジャで買われた藍をも含むものである。それらのうち後の2種の藍はバヤーナ藍より下等であるとみられていたので、藍の輸出が始まってからの最初の15年間はそれらの割合はおそらくまだ小さかつたであろう⁴⁹⁾。その後品質向上の結果その割合が上昇した。2シーズンについては総輸出中のクル

表16 VOCによるバヤーナ、メワート、クルジャの藍の輸出
(量と価格)と本国からの注文量(百位で概数化)

	総輸出		内Bandar Abbasと(又は) Basra への輸出		本国からの注文量 (ホンド)
	(ホンド[蘭])	(グルデン)	(ホンド)	(グルデン)	
1620-1621	?				?
1621-1622	111,600	f 73,900	0		?
1622-1623	?				?
1623-1624	150,700	f 96,500	0		200,000
1624-1625	124,000	f 90,600	0		?
1625-1626	?				?
1626-1627	198,600	f 156,100	0		?
1627-1628	133,700	f 119,400?	0		?
1628-1629	179,300	f 148,000	0		f 200,000相当分
1629-1630	161,200	f 142,300	0		?
1630-1631	0		0		?
1631-1632	217,700	f 220,600	0		?
1632-1633	± 540,000?		0		160,000-300,000
1633-1634	47,000	f 60,710	0		?
1634-1635	199,700	f 361,670	0		?
1635-1636	279,800?	f 356,300?	0		200,000
1636-1637	125,000	f 187,200	0		200,000
1637-1638	64,400	f 97,500	0		?
1638-1639	38,600?	f 52,100?	0		200,000
1639-1640	149,800	f 145,300	0		200,000
1640-1641	422,300	f 431,100	0		400,000(バヤーナ藍) 150,000-200,000(グル ジャとメワートの藍)
1641-1642	± 500,000	f 600,000?	0		?
1642-1643	155,700	f 154,300	0		100,000
1643-1644	209,900	f 178,800	0		150,000-200,000
1644-1645	100,900	f 105,500	0		100,000-150,000
1645-1646	86,700	f 98,800	0		100,000
1646-1647	79,500	f 95,600	0		?
1647-1648	145,000	f 179,400	42,200	f 56,900	100,000
1648-1649	?		?		100,000
1649-1650	180,000?		42,000	?	100,000
1651-1652	25,400	f 35,100	0		100,000
1652-1653	103,500	f 121,900	0		100,000
1653-1654	?		?		?
1655-1656	137,400	f 148,700	87,400	f 99,900	50,000
1656-1657	93,700	f 82,600	0?		?
1657-1658	13,800	?	0?		50,000
1658-1659	?		?		?
1659-1660	?	?	?		?
1660-1661	?	?	?		50,000

出典：VOC 1076, f. 395r., 396r.; VOC 1078, ongef. 9r.; VOC 1079, ongef. 179r.; VOC 1084, ff. 52r.-54v., 55r., 57r., 149r.; VOC 1094, ff. 253r.-257r., 268r.; VOC 1100, f. 181v.; H. Dunlop, *Bronnen*, p. 265, 313; VOC 1101, f. 605r.; VOC 1103, ongef. 131r., 136r., 140r.-144r.; VOC 1109, f. 171r., 183r.; VOC 1113, ff. 287r.-292v.; VOC 1116, f. 82v.; VOC 1119, p. 1601; VOC 1127, f. 33v.; VOC 1130, pp. 1156, 1184, 1266; VOC 1133, ff. 371r.-372r., 396v.; VOC 1134, f. 508r.; VOC 1135, f. 523r.; Coll. Geleynssen no. 225, 18-4 1641; *Daghregister Batavia, 1641-1642*, p. 194; VOC 1139, f. 357r.; VOC 1144, f. 418v.; VOC 1150, f. 116r.; VOC 1151, ff. 860r.; 860v.; VOC 1152, ff. 394r.-395r.; VOC 1153, f. 762r.; VOC 1162, ongef. 127v.; VOC 1165, f. 449r.; VOC 1168, f. 605r.; 608r.; VOC 1188, f. 576v.; VOC 1208, f. 461r.; VOC 1210, ff. 750r.; 750v.; 789r.-792r.; VOC 1224,

ff. 208r.; 208v.; VOC 1226, f. 732r.; VOC 1185, f. 677r.; *Generale Missiven*, II, p. 547; VOD 850, f. 211v.; J. P. Coen, *Bescheiden*, VII, 2, p. 1267; VOC 857, p. 470; VOC 858, p. 526; VOC 862, p. 352; VOC 863, p. 522; VOC 864, p. 352; VOC 866, p. 447; VOC 867, p. 389; VOC 868, p. 346; Coll. Geleynssen no. 284, f. 25r.; VOC 871, p. 391; VOC 872, p. 220; VOC 873, f. 95v.; VOC 874, p. 357; VOC 875, p. 305; VOC 1162, f. 130r.; VOC 1210, f. 710r.; VOC 1224, f. 249r.; VOC 1132, f. 372v.; VOC 1106, ongef. 8r., 87r.

ジャとメワートの藍の占める割合を決定できる。VOCの買付けの絶頂期のうちの1年である1640—1641年に、重役たちはバヤーナ藍40万ポンドとクルジャおよびメワートの藍15万ないし20万ポンドを注文した。その年アングラでメワートとクルジャの藍約16万ポンド——アングラでの藍の買付け総量の約40%——が買付けられた⁵⁰⁾。1644—1645年には、輸出された「バヤーナ藍」の約60%がメワートおよびクルジャの藍からなっていた⁵¹⁾。したがってバヤーナとその周辺で栽培された藍の正確な輸出量は不明である。我々がこの物産におけるVOCの市場占有率を決定する際、このことは重要である。最後に、これらの輸出量は原則としてある特定の年に買付けられた量と同じとみなされてはならない。船の積載能力が不足していたかもしれないし、あるいはアングラからの隊商が災難によって船の出帆直後にスーラトに到着したかもしれない。それゆえ、バヤーナ藍の輸出量におけるすぐ目につく振幅が部分的には諸運送手段が互いにうまく連絡されていなかったことによって起こされたということは頷けるのである。VOCは大変厳密なタイムテーブルを計算に入れなければならなかった。12月、1月、2月にアングラの南西で買付けがなされ、アングラからスーラトへの輸送には1カ月を要し、おそくとも4月に船がバタヴィアと共和国〔本国〕に向けて出帆したのである。

1620年—1640年の期間におけるバヤーナ藍に対する需要はおそらくかなり一定であった。すなわち年20万ポンドであった。それに対して1640年に重役たちが行なった注文はその2倍以上の大きさであった。55万ないし60万ポンドという注文は完全には満足させられなかった。その次の年もおそらく、約50万ポンドというバヤーナ藍の輸出量からみて、注文は同様に多かったであろう。1643年以後ヨーロッパでの需要が急速に減少した。はじ

めは10万ないし20万ポンドになり、1647年に年10万ポンドに落ち、1655年以降はわずか5万ポンドになった。したがって輸出量の減少も明白にうかがえる。1645年まで年平均20万ポンドのバヤーナ藍が輸出されたが、1646年以後には10万ポンドもなかった。それゆえ、得られたデータから、バヤーナ藍に対する会社の需要は1620年—1640年の期間はおそらくかなり一定であり、その後の1、2年間大いに上昇したが、その後はかなり低い水準にまで落ちたと結論することができる。17世紀後半の何か年間かはバヤーナ藍が全く買われず、スーラトからのVOCの総輸出に占める藍の比率はさらに縮小した。このこととの関連で1660年頃に、VOCがバヤーナに置いてある商館を売るかあるいはともかくその建物に対してそれ以上何も支出しないようにとの命令が出されたのである⁵²⁾。

会社の需要の変化はアムステルダムにおける市況に直接関係づけることができる。1640年—1642年における記録的な注文量は1639年のアムステルダムにおける「ラウロ藍」の販売価格の異常な高値の結果であった。1635年—1636年には1ポンドの藍がまだ2.90ないし2.95グルデンで売られた⁵³⁾。3年後に価格が1ポンド当たり6.00グルデンにまで騰貴した。アムステルダムでの価格はその後1641年と1642年に1ポンド当たり4.37ないし4.95グルデンに下がり、そして1644年には2.57ないし1.95グルデンにまで下がった。1645年にバヤーナ藍はアムステルダムで1ポンド当たり2.50グルデンで売られた⁵⁴⁾。同様の傾向はロンドン市場でもうかがわれる。1619年から1639年までの間価格は1ポンド（英）当たり5シリングと7シリングの間を変動した。1640年に11シリング7ペンスにまで価格が上昇した⁵⁵⁾。また我々がスペイン領アメリカとカリブ海地域産の藍である「グアテマラ藍」のアムステルダムでの販売価格をみると、ほぼ同様の価格変動が見られる。バヤーナ藍より若干優秀な品質だとみなされていたグアテマラ藍の価格は、1619年から1639年までの期間に1ポンド（蘭）当たり3.45グルデンと4.43グルデンの間を変動した。その価格は1640年に8.10グルデンまで上昇し、その後1641年と1642年に1ポンド当たり約5.00グルデンまで下がり、

グジャラートとヒンドゥスターンにおけるオランダ東インド会社、1620年—1660年（I）

その後の20年間は1ポンド当たり2グルデンと3グルデンの間を変動した⁵⁶⁾。

1640年頃の大幅な価格騰貴は、それに先だつ何年間かの供給量の少なさの結果であった可能性がある。その後、アメリカとインドからの大量の輸入と「困難期」ゆえのヨーロッパでの需要の減退とにより価格が下落した。アメリカからの競争によりVOCにとってインド藍の貿易はますます関心の低いものとなり、こうして新世界のプランテーションで栽培された藍とアングラ付近で独立の農民によって栽培された藍との間の競争戦で後者は一時的に敗北を喫したのである⁵⁷⁾。

バヤーナ藍の推定収穫量とVOCの輸出量との比較は——生産量とVOCの輸出量の各々における大きな振幅を考慮にいれても——やはり1620年—1660年の期間において会社がバヤーナ藍の最も重要な買手の一員であったといえることを教えてくれる。若干の年（1632—1633年、1640—1641年、1641—1642年）には会社が市場を絶対的に支配してさえいた。いくつかの例ではVOCの輸出量が推定収穫量より多いことが注目される。これは必ずしもこれらのデータの不正確さを証明するものではない。なぜなら、すでに述べたようにVOCの輸出量の中にクルジャおよびメワートの藍が占める割合を我々は考慮しなければならないからである。したがってこの生産物におけるVOCの市場占有率を正確に決定することは不可能であるが、ナクヴィ（H. K. Naqvi）が主張するような、オランダ人の輸出がバヤーナ藍の総輸出量の一小部分にしか当たらなかつただろうという説は決定的に誤っている⁵⁸⁾。1640年にアングラからある社員が、会社はバヤーナ藍の市場を支配している、と書いた。その年に栽培された藍の総量の3分の2がVOCによって買われた。「我々がその土地の最も指導的な商人たちだともみなされたので」売手と買手との間に招集される会合がバヤーナのVOCの商館で開催されたのである⁵⁹⁾。

〔未完〕